

博士論文（要約）

中学校学校図書館における生徒の居方に関する
検討

新居 池津子

第 I 部 問題と目的

本論の目的は、場所と生徒の行為との関係から、中学校の学校図書館を生徒がどのように意味づけているのかを明らかにすることにある。学校図書館法(1953年制定)に基づけば、学校図書館の利用者の中心は生徒である。したがって、学校図書館について研究を行う際には、生徒に着目する必要がある。しかし、先行研究の多くは学校図書館専門職員の立場から学校図書館の機能を議論している。つまり、学校図書館という場所における生徒の行為や生徒と教師の関係が十分に検討されてきたとはいえない。一方、建築学の領域では鈴木(1994)が「ある場所に人が居る時の状態、その時に周囲の環境とどのような関係をとっているか、またそれが他者にどのように認識されるかといったことの総称」を指す「居方」という概念を提唱し、場所を人の行為との関係から捉えることを試みている。そこで3部6章からなる本論では、学校図書館という場所の意味を生徒の行為から明らかにするため、「居方」を理論的枠組みとして検討する。

第I部では、先行研究を概観した上で、本論の研究課題を導出するとともに、理論的枠組みと方法について述べた。第II部(第3章～第5章)では、生徒の行為を、学校図書館固有の物理的な特徴と、生徒間や生徒と教師の相互作用の関係から生徒の居方として微細に捉え、実証的研究を行った。第III部では、第II部の知見をまとめ、総合的な考察を行うとともに、本論の研究の意義と課題を示した。

第1章 学校図書館を捉える諸視点

第I部第1章では、図書館情報学における学校図書館研究を概観し、以下の3点の課題を挙げた。第一に、学校司書や司書教諭等の立場や役割、読書活動や学習支援について検討されている一方で、生徒の行為や、生徒と教師の関係に焦点を当てた研究は少ない。第二に、生徒に焦点が当てられる場合にも、教授法や環境改善による効果が検討され、生徒が学校図書館の中でどのように活動しているのかについては明らかにされていない。第三に、学校図書館には図書資料や書架とその配置により生じる「仮想境界面」(益子,2011)等の場所固有の物理的な特徴もあるが、それらと生徒の行為との関係は捉えられていないことを指摘した。そこで、生徒が学校図書館をどのように意味づけているのかを明らかにするためには、教育学と建築学における先行研究を学校図書館研究に援用し、生徒間や生徒と教師の相互作用から生徒の行為を意味解釈する必要があることを述べた。また本論の目的に即し、①学校図書館の様々な物理的な特徴、その中でも館内固有の物理的な特徴として②閲覧机・書架、さらに書架の配置により生じる③「仮想境界面」に着目し、居方を検討するという3点を研究課題として導出した。

そして、これらの研究課題の検討を通して、学校の中にある場所として生徒が学校図書館をどのように意味づけているのかを明らかにすることを目的とした。

なお本論では、生徒の行為が生徒間や生徒と教師の相互作用等の社会的文脈から捉えられる時には場とした。そして、この場として捉えられる社会的な文脈と、館内固有の図書資料や書架の家具等と書架やその配置等の物理的な特徴との関係から生徒の行為を捉える場合には場所とした。さらに、心理的な側面が考慮される時には居場所として操作的に定義した。

第 2 章 方法

第 2 章では、学校図書館における生徒の居方を検討するための方法の説明を行った。3 つの研究課題を検討するために、生徒の行為を微細に捉えることができるマイクロ・エスノグラフィーを採用し、参与観察、半構造化インタビュー、質問紙調査と複数の方法を用いることにより、分析の信頼性と妥当性を担保することを述べた。本論では学習活動(第 4,5 章)を対象とするため、読書活動に実績を持つ A 中学校と探究的な学習活動に実績を持つ B 中学校の 2 つの公立中学校に研究協力を依頼した。なお、2 校において、それぞれ 20XX 年より数か月～数年間にわたりフィールドワークを行った。またデータ収集時に、学校図書館で行われた学習活動はビデオカメラで撮影し、昼休みの課外活動はフィールドメモ・ノーツをとり、主にそれらの収集データを分析の対象とした。学習活動(第 4 章・第 5 章)の研究協力者は以下の通りであった。読書活動の研究協力者は、A 中学校 1 年生 1 学級 29 名とその担任の SU 先生であった。読書活動の授業(計 5 時間)の参与観察は、SU 先生に対する半構造化インタビューにより補完された。また、探究的な学習活動の研究協力者は、B 中学校 3 年生 1 学級 33 名とその担任の SA 先生であった。探究的な学習活動の授業(計 6 時間)の参与観察は、SA 先生に対する半構造化インタビューにより補完された。また、課外活動(第 3 章)の研究協力者は、1 年間を通じて 2～3 月おきに計 11 回(確認のため翌年度末に 2 回追加実施)参与観察を行った B 中学校において 20 分間の昼休みに学校図書館を利用した計 474 名(のべ数)であった。また、年間を通じて参与観察を行った年度末に、主な利用者であった中学 1, 2 年生 336 名を対象として、昼休みにおける学校図書館の居場所に関する質問紙調査を実施した。なお B 中学校の昼休みを対象とした理由は、日常的に学校図書館で授業が行われ、生徒にとって慣れ親しんだ場所であること、また、昼休みは全校生徒が滞在する時間であり、学習活動と比較する上で適切であると考えたからである。

第 II 部 中学校学校図書館における生徒の居方に関する実証研究

第 II 部では、学校図書館をどのように意味づけているのかを明らかにす

なく(植松,2014),生徒が他者と距離を置く場所を同時多発的に創出させるという物理的な特徴を持つことが示唆された。

第4章 閲覧机・書架に着目した生徒の居方に関する検討

(研究3)(研究4)

そこで第4章では、学習活動が行われる学校図書館を生徒がどのように意味づけているのかを明らかにするため、研究課題②として閲覧机・書架に着目して生徒の居方を検討し、第3章の課外活動と比較検討した。

研究3では、A中学校1年生1学級29名とSU先生の学級で行われた各生徒がお薦めの本を学級で紹介する読書活動を分析の対象とした。まず、学級内の生徒と教師の相互作用の様相を把握するために、SU先生の支援をフォーマル・インフォーマル・両義的の3つに分類し、「仮想境界面」により閲覧スペースと隔てられていたマンガコーナーの2つの場所に分け、生徒別にクロス集計を行った。なお両義的な支援とは、たとえば発話の形式上では生徒が用いるような常体(インフォーマル)であるが、発話の内容としては、学習や課題に関わる(フォーマル)ともみなせる支援を指す。その結果、SU先生の支援は計525事例($\chi^2(2)=22.45$, $p>.001$)が観察され、1%水準で有意差が認められた。そこで授業で提示された課題に困難感を示していたが、教師の支援を受けることより、読書活動を楽しむ様子が観察された生徒1名を抽出し2事例について居方を検討した。その結果、教師が生徒間の交流を促す物理的な特徴を持つ閲覧机を利用し、読書活動を苦手とする生徒が選択した物語と異なるジャンルの本を話題に取り上げることにより、特定生徒への個別支援だけでなく、周囲の生徒にとっても関心を持つ本のジャンルが広がる支援となり、図書資料に関わる生徒の居方が閲覧机を介してみられた。

研究4では、B中学校3年生1学級33名とSA先生の生徒が個別に論文作成を行う探究的な学習活動を対象として分析を行った。まず学級全体の生徒と教師の相互作用の様相を捉えるために、SA先生の支援をフォーマル・インフォーマル・両義的の3つに分類し、「仮想境界面」により閲覧スペースと隔てられていた台座コーナーの2つの場所に分け、生徒別にクロス集計を行った。その結果、SA先生の支援は計2,168事例($\chi^2(2)=19.78$, $p>.001$)が観察され、1%水準で有意差が認められた。そこで授業で提示された課題に困難感を示していたが、教師の支援を受けることより論文のテーマ設定を行うことができた生徒1名を抽出し4事例について居方を検討した。その結果、教師が複数の図書資料を比較することができる物理的な特徴を持つ書架を利用するように生徒を促すことにより、探究的な学習活動の情報収集の方法を学ぶ場所として学校図書館を生徒が意味づけていると考えられる書架を介した図書資料に関わる居方が生徒にみられた。したがって第3章と同様に、閲覧机や書架を介して図書資料に関わる生徒の居方がみられたが、それらの図書

資料に関わる居方には教師の支援が影響を及ぼしていることが第4章より明らかとなった。そこで第5章では、生徒と教師の相互作用の中でも教師の支援に焦点を当てた。

第5章 「仮想境界面」に着目した生徒の居方に関する検討

(研究5)(研究6)

第5章では、第4章で示唆された学校図書館で学習活動を行う教師の支援に焦点を当て生徒が学校図書館をどのように意味づけているのかを明らかにするために、課題③として「仮想境界面」に着目して居方を検討した。

研究5では、人前で発表の練習することに抵抗感を持つ生徒を支援するために館内を自由に使うことを生徒に許可した教師の意図を大義名分として、マンガコーナーを利用した生徒1名に焦点を当て2事例を検討した。その結果、生徒の交渉は教師に交渉するための間仕切りとして「仮想境界面」を意味づけることにより始まるため、生徒の思惑と教師の意図の間にはズレが生じていた。しかし、教師が交渉に応じる過程で潜在的に支援を必要とする生徒に気づき支援の意図を拡張することで、生徒が教師に支援を求めやすい関係を築く教師の支援に対する生徒の居方がみられた。

研究6では、閲覧スペースと台座コーナーの間仕切りとなる「仮想境界面」を越境し、館内の様々な場所で1名の生徒が示す多様な居方について9事例を検討した。その結果、課題に対する困難感に対処したり心理的に不安定な状況にある自分と折り合いをつけたりするため館内の様々な場所で支援を求める生徒に対して、教師は身振り・笑い・言いよどみとして現れる葛藤を伴う応答をすることが示された。したがって教師の応答的な支援の中には、生徒との関係の構築や保持をするのか、あるいは、課題に関わる助言や提示を行うのかといった教師の葛藤が含まれていることが示唆された。一方で、探究的な学習活動で対話を重視する教師が応答的に支援を継続することにより、生徒が教師を探究的な学習活動に必要な対話相手として捉え意味づけを変化させていると考えられる教師の支援に対する居方がみられたことから、生徒の意味づけと教師の意図と重なることが示唆された。

第Ⅲ部 総合考察

第Ⅲ部では、総合考察として、実証研究により明らかになった知見を示した。また最後に、本論の意義と課題を示した。

第6章 総合考察

本論では、生徒が学校図書館という場所をどのように意味づけているのかを明らかにするために、館内の物理的な特徴に着目し生徒の居方を

検討してきた。そこで、第 6 章では、以下の 3 点の知見を示した。

第一に課外活動や学習活動にかかわらず、生徒の多様な居方より、生徒が居場所として意味づける場所は 1 つだけであるとは限らず(研究 1, 研究 6), 館内の物理的な特徴により創出される場所に対して、生徒が必要に応じて意味づけを行うことが示唆された(研究 2, 研究 3, 研究 4, 研究 5, 研究 6)。また生徒の多様な居方は、生徒は学校図書館の物理的な特徴を甘受するだけでなく、館内に創出される特定の場所に自分の居場所として意味づけを行うことや(研究 1, 研究 3, 研究 4), 書架とその端部の「仮想境界面」により創出される場所や館内固有の閲覧机や書架等の家具やその物理的な配置を複数組み合わせることで利用し、他者と距離を置き自分が過ごすことができる場所として意味づけ、同時多発的に居場所を生徒が創出していることを示していることが明らかとなった(研究 2, 研究 5, 研究 6)。したがって、学校図書館には図書資料にかかわる居方の他にも多様な居方が生じるが、それらは、学習活動と課外活動ともに、多くの他者の中で、課題に対する困難感に対処したり、他者と折り合いをつけたりするための生徒の姿を示しているといえる。

第二に生徒だけでなく、教師も館内の物理的な特徴を意図的に利用し、支援に結び付けていることが明らかとなった(研究 3, 研究 4, 研究 5, 研究 6)。また、書架や閲覧机といった学校図書館の物理的な特徴を利用して学習活動を行おうとする教師の意図が生徒の意味づけと重なる時だけでなく(研究 3, 研究 4), 生徒が教師の意図を大義名分として利用する一方で、その生徒の意味づけを教師が利用し支援の意図を拡張させ、応答的な支援を継続させることにより、支援を必要とする生徒が教師に支援が求めやすくなる関係が構築される交渉が行われることや(研究 5), 教師を探究的な学習活動に必要な対話相手として捉え、意味づけを変化させていると考えられる(研究 6)教師の支援に対する居方が生徒にみられたことから、生徒と教師の相互作用が教育課程上の学習活動に位置づく可能性が示唆された。

第三に、課外活動だけでなく(研究 1, 研究 2), 学習活動においても(研究 5, 研究 6), 館内にはあらゆる場所に図書資料が配架された書架が設置されているため、生徒はどの場所活動で行っても館内に居合わせる生徒や教師に図書資料を閲覧していると認識させることができる場所であるという学校図書館が持つ物理的な特徴を持つ可能性が示された。課外活動において自分が居られる場所を創り出すために館内に設置されている閲覧机や椅子や台座を大道具として利用したり、図書資料を小道具として、手にしたり眺めたりすることにより読書をしていると装うことを可能にしていた(研究 1, 研究 2)。同様に、「仮想境界面」を介した交渉(研究 5)や、「仮想境界面」を越境した応答(研究 6)等の教師の支援に対する居方が生徒にみられた背景には、館内が書架により構成されるあらゆる場所に図書資料が配架され、どの場所で学習活動を行っても館内に居合わせる多くの生徒に不自然に捉えられないという学校図書館の物理的な特徴が影響を及ぼしていると考えられる。

本論の意義は、学校図書館の物理的な特徴に着目し、居方という理論的枠組みから生徒の行為を捉えたことにより、館内の物理的な特徴を利用する生徒の思惑や教師の意図のズレが調整され、両者の意味づけが重なる相互作用が教育課程上の学習活動に位置づき、学校図書館が生徒に意味ある学びの場所となる可能性を示したことにある。ただし、本論では少数の事例を示している点に限界を持つため事例を蓄積する必要がある。また、館内ルールが生徒の行為に及ぼす影響については居方を理論的枠組みとするだけでは検討することができなかった。そこで今後の課題として、そこで今後の課題として館内ルールに影響を及ぼす教師の意図と生徒の認知を比較検討するため、教職員に対する質問紙調査と生徒に対するインタビューを行い、学校図書館という場所で生徒が学ぶ意義をより明らかにする必要があると考えられる。この学習活動における館内ルールについては学術研究だけでなく、学校図書館の教育現場に携わる実践者にとっても関心が寄せられることが予測される。したがってこれらの研究課題に応え、学校図書館という場所での学習活動のあり方に示唆を得ることは、実践にも寄与するものと考えられる。